

プルビチャチュ 6658m世界初登頂 42 周年記念集会 記録

ボランティア事務局 中川和道 20240310

- ・ 2024 年 3 月 10 日 国労大阪会館 15-17 時
- ・ 隊員 7 名 事務局 1 名 記念講演講師 1 名 他府県連 4 名 大阪府連会員約 30 名 計約 40 名
- ・ 記念講演+隊員トークの録画 4 時間分 あります 問合せ：中川 climber-nak@bca.bai.ne.jp

あいさつ

安田：プルビチャチュ登山隊隊長の安田一郎です。私から大阪府勤労者山岳連盟の顧問の中川和道さんに打診しましたところ、プルビチャチュ初登頂 42 周年の記念集会和、連盟行事として、本日、開催していただくこととなりました。登山隊を代表して厚くお礼申し上げます。

司会を中川さん、よろしくをお願いします。

中川：中川です。私は登山隊メンバーではありません。登山隊と連盟を結ぶ「ボランティア事務局」として司会進行をします。

本日の記念行事では、15 時から記念講演 1 時間、近藤和美(かずよし)さん

「高所登山 これまでとこれから」、16 時から登山隊隊員トークを 1 時間弱、18 時から懇親会を行います。



記念講演

では、記念講演を始めます。近藤さんの紹介をさせていただきます。

近藤和美さんは、82 歳の現役の高所アルパインクライマー。お配りしましたリストのとおり、3000m以上の山に 115 回以上も登られ、数百人を高所に導いてこられました。

1972 年 30 歳の時、ヨーロッパで海外登山を始められました。1976 年、マイクトリ・デブトリ(約 6800m)で、ヒマラヤで初めての交差縦走を実現。その創造性に、中川は、度肝を抜かれました。旧ソ連邦の 7000m 峰 5 峰を全部登り、スノーレオパード(雪豹)称号を、1991 年



に、旧ソ連邦以外では世界で唯一、授与されました。8000m 峰の最初は 1992 年のチョーオユー。これを皮切りに、8000m 峰への挑戦は 24 回。エベレストを含め 8000m 峰の 9 座に登頂。日本人第 2 位。61 歳でのガツシャブルム II 峰は 8000m 峰での日本人無酸素登頂最高齢記録です。昨年 2023 年にも、登頂はなりませんでした。81 歳でアンナブルナ I 峰 8091m に挑戦され、その記録を配布資料にして下さいました。

記念講演のタイトルは、「高所登山 これまでとこれから」であります。近藤さん、よろしくお願いいたします。配布資料：パミール テンシャン 16 6500-7000m 23 8000m 24 その他 52 計 115 峰

**** 以下、記念講演 **** 記録は別掲とします **

隊員トーク

中川：では、隊員トークを始めます。本日は、隊員のうち7名が前列に着席しております。この隊員トークには、記念講演「高所登山 これまでとこれから」をやっていた近藤和美さんもお同席下さいます。

山の紹介、Google Earth でやります。画面をご覧ください(Google Earth 展開)。ネパール語でブルビチャチュの意味は、カトマンズ近郊から見て「東の方向の大きなこうもり」。素敵な名前ですね。中川は、これを見て、こんな難しい山を、よく、登ったな、との感慨をもちました。

中川：まず、登山の概要です(写真1)。1982年、42年前、労山大阪府連16名はネパール登山協会3名と合同登山隊を組んでヒマラヤの未踏峰ブルビチャチュ6658mに挑みました。第1次隊7名が5月1日、世界初登頂。5月3日に第2次隊9名も登頂。合同隊19名のうち16名が登頂を果たしました。

アルパインクライミングとしてすごいだけじゃありません。大阪労山の歴史にさんざんと輝く成果、未来に引き継いでいくべき成果であります。関係者は今や高齢の域。今回、関係者を、今の仲間、若者を含め、今の仲間、当時の意気込みをたどり、我が大阪労山の将来を展望する糧としたいものです。

中川：隊員紹介と役割分担の紹介です。ベースキャンプ集合写真です。名前をお呼びします。挙手ご起立いただき、現在の顔見せをお願いします。

[中川:投映画面の顔を順次拡大]隊長安田一郎さん→副隊長滝上肇さん→マネージャー藤川櫻彦さん→医師野納邦明さん札幌在住→登攀リーダー3名(黒川慎太郎さん 竹沢一誠さん他界 岡本浩光さん本日ご不在)→隊員(伊原弘晏さん本日ご不在 装備係服部功さん他界 撮影西岡孝さん 大井チズ子さん本日ご不在 食料チーフ山野(河野)純子さん 清水久信さん他界 荒木香さん本日ご不在 新垣(しんがき)隆さん本日ご不在 この写真撮影をされた小川史人さん)。本日ここには7名がご出席です。次に、ネパール隊からリエゾンフィサースンドルさん ネパール登山協会から

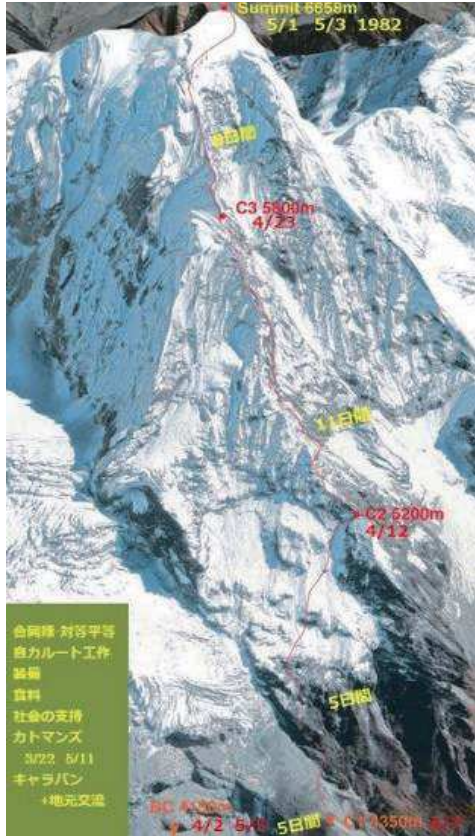


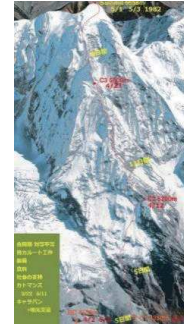
写真1 登山ルート、日程、トークの5項目



3名アンブリさんサードー ペンバさん ミンマさん。登山隊 19名中 16名がサミット。すごいですよね。

中川：それでは、日程概要です。画面(写真 1)を見て下さい。

カトマンズに入ったのが 3/22、山からカトマンズに戻ったのが 5/11、約 2 カ月もの登山でした。BC から C1 に 5 日、C1 から C2 に 5 日、C2 から C3 に 11 日、C3 から頂上まで 8 日の約 30 が登攀期間でした。BC4150mに入ったのが 4/2。登山隊が初めて名付けた「南西稜」、これを登りました。C1 4350m建設が 4/7、C2 5200mが 4/12。ここから岩稜帯という手ごわいルート工作 11 日、全ピッチに固定ロープで 4/23 に C3 5800m。かちかちの青氷アイスクラップを 8 日かけて突破し、5/1 に 7 人が 6658m世界初登頂。連盟前会長の西村晃一さんは、メーデーだ、めでたいと。5/3 第 2 次隊 9 名が続いて登頂。この 5/3 は憲法記念日。ほぼ毎日、午後は雪だったのに、この 3 日間は、何と、好天だった。「天気運も実力のうち」そのものです。



中川：隊員の方々から、これら 5 つのテーマ(合同隊-対等平等、自力でルート工作、装備食料、社会からの支持、現地交流)について、隊員トークをお願いしていきます。

中川：この隊の特徴は、第 1 に合同隊。大阪府連とネパールとの合同隊でありました。労山全国連盟のヒマラヤ隊以来、合同隊でやるのが定着。安田隊長、対等平等、やってみて、いかがでしたか？

安田：はい、ヒマラヤ登山になくてはならないシェルパの人たちを単なる使用人というのじゃなく、対等平等、これは大切なことだと思えました。こういう対等平等の関係が、近藤和美(かずよし)さんが講演された「ネパール人登山家の自立」につながればと思います。

中川：ガイドに固定ロープを張ってもらうじゃなく、対等平等にルート工作をした。全部で 4000m もの固定ロープを運び、合同隊全員で張りました。スノーバー 100 本アイスハーケン 100 本ロックハーケン 100 枚ポルト 30 本、ワイヤーばしご 2 基。搬入した装備食料は 2.3 トン、総費用 1300 万円。連盟では 6 年前から研究会を立ち上げ(写真)、2 年前 1980 年の府連総会で実行を決定。半年前から隊員募集とトレーニング。半年で 1000km ランニング。人工登攀でのルート工作に備えて屏風岩東壁ルンゼなどを登られたのですね。半年間で 1000km ランニング達成は 2 名、伊原さんと藤川さん。大井さんも寸前に迫った。大井さんは女性だけのパーティーで屏風岩から滝谷へと登っておられた強者(つわもの)です。では、1000km 達成者のおひとり、藤川さん、1000km とは？



藤川：はい、もともと陸上中距離ランナーでしたから、1 回に 6, 7 キロ走りました。健康診断では、城東診療所から大阪城まで往復 20 キロ走って、心電図を取る方式でした。全員合格です。

中川：城東診療所の木下先生が、安静時の心電図じゃだめだ。走ったあとの心電図をとるのだとおっしゃった。そういう診断だったそうですね。

中川：社会の支持があった、この話をお願いします。教育委員会に推薦もらってネパールの学校、これは推薦

もらってネパールの学校、この写真はゴダワリ小学校の子どもたちから絵を受け取って、これは、波除(なみよけ)小学校の絵を箱詰めしているところ。藤川さん。

藤川：今も我が家にネパールの子供の絵が8枚ほど残っています。写真はその1枚です。



中川：何度も何度も重ね書き。すごく丁寧です。

中川：教育委員会からの推薦を活用した。「教育委員会から

推薦をもらっているんだから」と会社に休暇申請。何しろ期間が60日近い休職願。退職じゃないのがすごい。

1982年頃は、ヒマラヤに初登頂をというと、珍しがって下さったんですって？服部功さんが、大阪労山50周年記念集会で語られました。「まるでハイエナのように企業を回った。いろいろくれた」と、いたずら小僧のような目で語った。あのお顔を、中川は忘れることはありません。

会社がいろいろくれた。前田のクラッカー、チキンラーメン。他には？

そうそう、ブルビチャチュ隊は、タバコも持って行った。それもカートン単位で大量に。西岡さん。

西岡：専売公社へ行って取りに行ってくれと言われて取りに行きました。そこでは、海外親睦用チラシにタバコがあり、そこで内容がわかりました。何カートンあるかわかりませんがダンボール箱、一人でやっと抱えてもって帰り、現地でいろいろな所で渡していたように思います。そのたばこ日本製は人気があったように思います。

中川：藤川さん。靴のほか軍手とか、軍足(木綿製の靴下)ももらったんだそうですね。

藤川：プレモンスーンなので、BCの下から雪がある事が想定されたんで、私の職場の多数の人から寄付いただいて、ポーター150人分持って行きました。

キャラバンの後半、実際に雪が出て来て、騒ぎになりましたが、皆に配って、無事BCまで荷物をあげることが出来ました。やはり準備は大事です。

中川：山野純子さん、食料チーフの山野純子さんにお聞きます。大阪で、社会の支持は？

山野：いろんな会社から、また労山から、暖かい支援をいただきました。例えば、日清のインスタントラーメン、ハウスのレトルトカレー、大塚のポカリスエット、ジフィーズなど。細かい所では、梅干し、ふりかけなどなどです。

卸売り市場に出向いた折り、乾物会社の社長さんから「頑張れよ！」と思いがけず1万円頂きまして、ジーンと来ました。

こうして集まった品物が事務所に次第に山積みになって行くのを見ると、『これは本当に1人でもいいから登頂せなアカンな』とプレッシャーがかかったのを覚えています。結果として大人数の登頂ができて、ホッとしました。本当に良かった~~~~！です。

中川：小川さん、社会の支持について、ご紹介下さい。60日もの休暇がとれた状況は？隊員みんなを代表して・・・

小川：休暇を許してくれる、今よりも、ゆとり(包容力)がある社会だったのかなあ・・・。

中川：ここからは、ルートの取り方や成功率の見込みなど、作戦についてお聞きします。

中川：ルート原案決定の中心になられた副隊長の滝上肇さん、81年の偵察隊 伊原弘晏さん
橋本克彦さん 井波美保さん、3名が持ち帰られた写真でルート原案を決めた・・・。

滝上：はい、原則は「ナダレの危険が最も小さいルート」。少し前に私が大山北壁でナダレにやられて数百m流され、やっと生還した。大阪府連は、鹿島槍ヶ岳でもナダレで2重遭難にやられた(1974、これが救助隊結成の動機となった)。だから、「ナダレの危険が最も小さいルート」を考えた。偵察隊の写真には写ってない所があって、現実には、修正が必要でした。

中川：では、登攀ルート図の区間ごとにお聞きしていきましょう。まず BC～C1、C1～C2 を、安田隊長。

安田：4月2日にはベースキャンプを設営しました。4日にはプルビチャチュの全容が見える4400m地点まで出掛けました。

中川：この写真ですね。ここに一列で登ってる。

安田：そして登攀ルートを目で追ってみました。5日には氷河を渡り、上部のアイスフォールが崩壊しても直撃を避けられる場所をC1キャンプ4350mとしました。6日にはキャンプを設営してほっとしました。そこで、C1キャンプの上にある岩場を「大岩」と名付けました。

中川：この写真です。

安田：大岩は傾斜が70度くらいで、大岩を乗越しててっぺんに出た時、初めて、雪田が南西稜につながっているのが分かった。それで「行ける、これは成功できる」と確信したのです。

中川さん提供のこのGoogle Earthは10月30日撮影。私たちが登ったのは4月から5月。ネパール隊員から「今年は雪が多い」と言われました。ほぼ毎日、朝は晴れていても午後からは雪が降って雪崩の危険がありますが、腰まで埋まってラッセルしていました。積雪のためロープが埋まったり、ラダー「15mワイヤー梯子」を掛けました。

中川：この写真がそのラダーです。荷揚げしています。

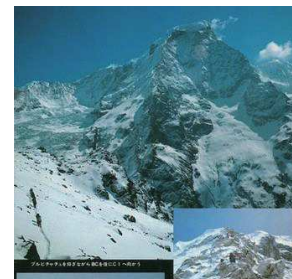
安田：4/12にキャンプC2、5200mを建設しました。

中川：この写真です。

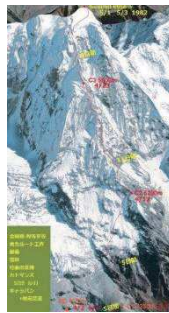
安田：6人用テント1張り。この南西岩稜を登れば登頂だ！万歳！という明るい展望が生まれました。

中川：未踏峰だから、取付く時は情報のすべてはそろっていない。隊長は、勝率は何割だと？

安田：日本では60%でした。81年に調査隊を出したあと、あらゆる角度から登頂の可能性を検討しました。頂上に延びる南西岩稜が一番いいのではないかと考えました。が、その時点ではアイスクャップの状態(雪なのか青氷なのか)がよくわかっていませんでした。ですから、BCでの勝率と言われれば、70%～80%でしょうか。



中川：次は C2～C3 の、ここ岩稜帯 11 日間。手こずりました。先頭に立たれた竹沢さんたちが今はおられません。写真は、ルート工作に向かう隊員一同。ひとり群を抜いて強い。では、荷揚げのご苦労を、西岡さん。



西岡：C3 テントを張ったとの知らせに、燃料のガスカートリッジと食料を C3 に運び入れる必要がありました。C2 にあるその荷物を C3 まで、距離が長くて標高が上がる。行って帰ってくるのは体力的にも高度順応にもまだ無理でした。



中川：写真ではこんな調子。標高 5700m とか。

西岡：だから、C3 からと C2 との間地点で荷物の受け渡しをしました。下からの無線からも同時スタート、相手が見えたときは感無量で、いい考えだと思いました。5 人ずつだったと思います。

中川：次は、C3 からの青氷とアイスキャップから頂上までの 8 日間。黒川さん、頂上まで、ご紹介下さい。写真を 4 枚みて下さい。登ってみたら、青氷だった。ヒマラヤの青氷は本当に硬いんですね。厚い鉄板の上をアイゼンが滑るみたいな。ピッケルでステップをカッティングなされた・・・。



黒川：はい、一撃ではとても切れなくて・・・。細かい粉がキラキラ飛び散るんですが、ステップはちっとも広がらない。何しろ 15 人以上が登るんだと思って・・・腕が疲れて、1 日、休養しました。



そうそう、青氷の途中で、アンプリが「ここは危ない。あなた、登ってくれ」というんです。私がリードで登りました。でも、あと 30cm が、どうしても登れない。その日は、そこで下りてきて、次の日に突破した。そんなこともありました。



中川：岩稜帯やアイスキャップで大活躍したという、「ゴキブリ 5 人衆」って、何ですか？ 藤川さん。

藤川：ゴゴキブリ 5 人衆とは？ 藤川、岡本、竹沢、清水、伊原、の事らしいです。私以外ここにいないので、私が話します。

ルート工作って、1 回で行かないんです。登りつつロープを張り、終わって下って見ると、必ずしも合理的で無い。又、登り返して張り直す・・・。これを何度も繰り返して上に下に右に左にゴキブリみたいにチョロチョロしたので、そんな 5 人を見て、名付けられたのかな・・・？ と思ってます。チョット、ゴキブリはイメージ悪いけど・・・。

中川：ゴキブリ 5 人衆、何か、そのままやけど、行動能力の高さに対する尊敬やで、そりゃあ。



中川：さて、いよいよ頂上雪原です。黒川さん。

黒川：はい、アイスキャップを越えたら、本当に広がった。写真のとおりです。

中川：「山と仲間」に発表なされたルート
図（この写真）には「甲子園球場」って。

誰やねん、あれ、書いたんは？黒川さ
ん？ですか？

黒川：私じゃないかなあ。

中川：ロープは足りたんですか？

黒川：いいえ。フィックス用のロープ 4000
m は、もう残ってなかった。

中川：この写真のこの左が頂上。頂上までは、足りない。

黒川：はい、それで、クライミングロープを使って、頂上までやっと届いた。さらに、スノーバーも使い果たして、残っていなかった。うーん、と考え、自分のアイスバイルを打込み、それを残置しました。えい、記念だ、置いてやれって。

中川：おお、黒川バイルが山頂に残ってる。そりゃ、値札付きですなあ。拾いに行こうかな。

安田隊長、隊長は、この事態、をどう把握しておられたのですか？

安田：隊長への無線では、ザイルは少し残っているが、アイスハーケンやスノーバーなどがほとんどない、とのことでした。「足りなくなったために登山が打ち切り」となるのが心配でした。だからアイスクャップにルートが完成したと無線が入ったときは、これでルートが開けるぞ、と胸をなでおろす気持ちで、成功を確信しました。

黒川：これが初登頂の写真です。第1次隊7人が5/1に
世界初登頂しました。

中川：おめでとうございます。誰と誰ですか？

藤川：左が小川、右が岡本です。

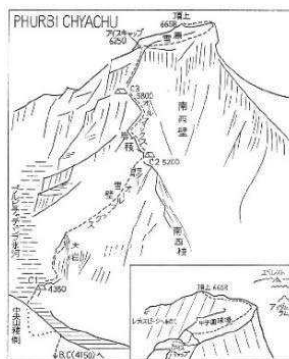
中川：さて、5/3には第2次隊9名が登頂を果たしま
す。藤川さん。

藤川：はい、まず、この一人の写真は西岡です。次の写真は、左から、
藤川、安田、服部、河野です。

次の写真の「山と仲間」の記事の、第2次登頂隊の行動記録は私が
書いたものです。第1次登頂隊が登頂を果たし、安堵感が胸いっぱい
に広がりました。そして、今度は2次隊の出発です。ただ、天気が3
日も、もつかどうか、ただただ、天気が心配でした。

中川：見出しには「涙・涙の登頂ドラマ」と。「山と仲間」当時の編集部は
近藤和美さん。こんな感情前面の見出しを、ほんまに、つけはったんかいな？
と思ったんですが。涙・涙の登頂、これは、藤川さんの地声ですか。

藤川：はい、まだ頂上に達していない河野純子が登りながら泣いているんで



『山と仲間』1982年8月号



す。みんな泣きました。私は思いました。1975年、海外委員会活動から始まった。1000km 走ってきた。その先にこそ、目の前の、この頂があるのだと。「山と仲間」に書いたとおり、涙・涙の登頂でした。

中川：本当に、おめでとうございます。

中川：隊は下山。これは到着当時のBCかな？ 5/5 BCに集結した時にはもう、雪はなかったんでしたね。登攀期間は31日でした。



中川：3つの話題を語って下さい。食料、撮影、墜落。

話題1つ目は食料。食が足りれば万事おさまる。食料チーフ、カナ・サーブっていうんですね、山野さん、食料は・・・

山野：食料担当としては、カトマンズに帰り着くまで過不足のない食事提供が第一、その点はかなり注意しました。

ひとつ、食料のエピソードを。ベースキャンプで、ある時、安田さんが改まった様子で私の所へ来られたのです。『何か問題でも…』と私も身構えたのですが、何の事はない『もっとコーヒーを多く出して』と云うリクエストでした。どうやら、コーヒー好きのメンバーが、おっかないカナ・サーブにコーヒーの交渉をと、安田さんを担ぎ出したみたいでした。もちろんOKしました。が、ルート仕事をバンバンやってるメンバーがコーヒーの交渉を安田さんに頼むなんて、なんか可愛いなと思いました。



中川：かわいい・・・？！

山野：それにしても、私ってそんなに怖かったんでしょうかネ～？黒川さん！

全員：ハイ！とっても！

会場：(笑い)

中川：話題2つ目は、撮影。西岡さん、報告書に書かれましたね、あの本音。

西岡：最初は登攀中に撮影はしたくなかった。今まで撮影中に事故は他人ですが何回か遭遇しています。

足下の注意力が散漫になると思います。でもカメラマンを雇う話があり、些少なから仕事にもしていますので、私がやりますと言っちゃいました。その時は、デジタルカメラはなく、アナログフィルムカメラ6×7ブローニサイズと、8mmアナログムービーカメラでした。やはり重たく、フィルムの入れ替えも多く、ピッケルを雪面にさしてザックをかけ、ザックの中で雪が入らぬように、よく入れ替えました。アイスキャップ直下での8mmムービーの撮影の時、これから登頂するときにこんなことしていいのか、ちょっとよぎりましたが、私の使命がしたと思います。しかしあそこは怖かった・・・

中川：話題3つ目は、墜落を停めた。6200m付近のアイスキャップで、青氷のルート工作の途中。リー

ド藤川さんが10mくらい落ちたのを、ピレイヤー伊原さんが止めた。藤川さん。

藤川：馬ノ脊のような氷の急登でした。15人も登るので、氷を削って足場を作るため、ピックルとパイルでカッティングしていて、スリップして左に落下しました。アイスハーケンを打っておいたので良かった。伊原さんもベテランです。うまく制動を掛け、ハーケン抜けを防いでくれたので助かりました。ボディービレイでしたので、ザイルが擦れた個所のヤッケが溶けてました。

中川：10mくらい落ちたんだそうですね。よく止められました。百丈やぐらを建設し確保訓練を推進してこられた滝上さん。ヤッケが溶けた、とは・・・

滝上：ヤッケが溶けたのは、制動確保に成功して少し流したからやな。もし固定確保とかやって大事故になっていたら登山は中止だった。2人の日頃の修練のおかげで無事故となり、世界初登頂につながった。みなさん、制動確保の練習をしましょう。

中川：武勇伝ですなあ。

中川：時間が尽きました。隊員のみなさまから、大阪労山の仲間、とくに若い仲間に向けて、お願いします。

西岡：呼吸法について。息を吐く時、口をすぼめる。圧が上がるのだと思う。ろうそくを吹くイメージだという人もいる。海女さんが海面に上がって「笛を吹く」という。あれもそうなのだろう。参考にして下さい。

中川：近藤さん、呼吸法について。

近藤：強く吹く。こんなやり方だ(マイクを、ゴォッと、強く吹かれた)。吸う方は自然に強くなる。

近藤：6000m台の未踏峰は、ヒマラヤなどには、たくさんある。無名峰も結構ある。壁の要素が強い山が多い。今は装備も登攀技術も発達した。高所順応トレーニングが都会でもできる。2週間で登れる可能性もあるかも。挑戦が待たれている。

中川：大阪府連役員の方から、お開きのごあいさつ、よろしく願いいたします。園敏雄会長。

園敏雄会長：アルパインクライミングや高所登山の分野にはあまり興味を持たずに来た。本日は、感動した。身近におられる方、日頃から、もっと語って下さいね。本日は、ありがとうございました。



隊員トーク。左から小川、黒川、背後に藤川、西岡(手にマイク)、安田、滝上、山野(河野)。